

# ルソー研究にみられる 女性の視点

舟橋喜恵

総合科学部  
社会文化研究講座



## PROFILE

- (ふなはし・よしえ)
- ◆ 総合科学部教授
- ◆ 社会科学コース所属
- ◆ 専攻は社会思想史、とくに十八世紀啓蒙思想研究

## ある学会風景から

一九八〇年代後半のある学会風景を  
ご紹介しよう。

報告は淡々とすすめられ、決められた  
四十分の時間内につきり終わった。  
報告の正式の題名は、今になってみる  
と正確には思いだせないが、ルソーの  
『社会契約論』(二七六二)に関する報  
告だったから、その学会にとっては、  
まずは手慣れたテーマであったし、従  
来の研究動向からみて、とくに異論を  
よびそうな刺激的な内容でもなかった。  
ゆるやかな階段状になった教室には、  
かなりの数の聴衆がいたが、簡単な質  
疑応答があり、司会者もこれで終わり  
という感じで、ほかに質問はありませ  
んか、といった時だった。

手は会場の後ろの方からあがった。  
「お話の趣旨は理解しました。ところ  
で御報告にあった人間の平等について  
ですが、ルソーが人間という言葉を使  
うとき、その人間には女性は含まれて  
いるんでしょうか?」質問内容をメモ  
するため下を向いていた報告者が、びっ

くりして顔をあげた。予想もしない質  
問を投げかけられたという様子で、瞬  
時に回答が頭に浮かんでこなかったの  
は確かのようにだった。司会者も同様ら  
しく、一瞬ぼかんとした表情をみせ、  
それから異物をみるような目で質問者  
の顔を眺めていた。

何か言わなければならぬ立場に立  
たされた若い報告者は、しばらく考え  
込んでから、当惑した表情で「わたく  
しはその方面の専門家ではありません  
から、わかりません」といい、心配顔  
の司会者は、とにかく報告者が声をだ  
してくれただことに安堵したのか、時間  
がきたことを理由に質疑を打ち切った。

## ルソーの女性観

質問者の側からすれば、ことさら人  
間の平等をいうルソーが、おなじ人間  
である男性と女性をどうみていたか、  
両者の関係をどう位置づけているかと  
いう問題は、報告内容の核心にかかわ  
ることだから質問したのである。「その  
方面の専門家」であろうがなろうが、

それに答えられないのなら、報告その  
ものの前提を疑われてもしかたがない。

正直に言って、耳学問ではなく、ま  
ともにルソーの著作を読めば誰にもわ  
かることは、ルソーは女性を「従属す  
べき性」と呼び、男性とは正反対の人  
間として描いていることである。もち  
ろん十八世紀のルソーの時代に、生物  
学的性の差異を男女の優劣の理由づけ  
に使う考え方は珍しくはなかった。そ  
の意味ではルソーも時代の子だった。

しかしルソーの場合は特別の意味を  
もたざるをえない。なぜなら他の男性  
優位論者とちがって、ルソーは、男性  
については、肉体上の差を社会的差別  
の理由とすることに反対した人だった  
からである。ルソーは『社会契約論』  
より先に書いた『人間不平等起源論』  
のなかで、自然的・肉体的不平等と社  
会的・政治的不平等を区別し、この二  
つの不平等を結びつけることに反対し、  
その結合を断ち切った。

これこそルソーの重要な点である。  
ところがルソーは男性については二つ  
の不平等は無関係だといっているが、女

## ルソー研究のアキレス腱

性については両者は結合しているとい  
う。したがってルソーのいう人間の平  
等は人類の半分の男性についてしか適  
用されていない、といわざるをえない。

こんなわけでルソーの人間平等論は  
実は男性論であって、女性論を含ん  
てはいない。そしてルソーの女性論は、  
彼の平等論を高く評価するルソー研究  
者たちにとっては、なんとも居心地の  
悪い分野になっている。最近は少しず  
つ軌道修正されているとはいえ、「女性  
をルソーが軽蔑していたとはどうして  
も考えられない」とか、ルソーの有名  
な著書『エミール』(二七六二)にでて  
くる性差別的記述を認めたらうで、女  
性差別はルソーの本意ではないと弁護  
する人は決して珍しくはない。

ルソーの女性論はルソー研究者のア  
キレス腱であったし、今もそうありつ  
づけているといった人がいるが、現在  
も状況はあまり変わっていないらしい。